

私が『介護の仕事』を選んだきっかけ

佐々木 洋平



イラスト屋@ばれっと

私は今、介護療養型医療施設の病院で、介護福祉士として『介護の仕事』に就いています。介護療養型医療施設とは、治療を終えて、長い期間の療養を必要とする患者さんの為の医療施設です。去年に介護福祉士の試験を受験して、なんとか合格でき、今年になって、介護支援専門員（いわゆるケアマネジャー）の実務研修受講資格試験に、ギリギリで合格することが出来ました。今の病院で私は、リハビリテーションの助手からスタートし、病棟の介護員になり、介護福祉士試験に受かって介護福祉士となりました。現在は病院に介護福祉士として勤めながら、ケアマネジャーになる為に、実務研修というものを受けています。

『介護の仕事』と聞いて皆さんがイメージする事と言えば、きつい・汚い・危険といういわゆる3Kのイメージだと思います（介護の危険とは、感染症に対する危険、とも言われていますし、最後のKは《給料が安い》のKだという人もいます）ので、とても人にお勧め出来るような仕事ではありません。それに勤務する施設によつては、夜勤もしないといけないし、土日祝日や年末年始、お盆だって仕事しないとけないし、腰痛や膝痛など、身体がだんだん痛くなってくるし・・・と愚痴を上げればとめどなく出てきて、止まらなくなるくらいの大変な仕事なんだと私は思います（もつと大変な仕事はたくさんあると思います）。そんな『介護の仕事』を、私は9年間続けています。

私はこの仕事をやる前は、夏期はゴルフ場でコース管理をする仕事を、冬期は宅配業者で深夜に入る荷物の仕分けの仕事をしていました。夏期は機械に乗ってゴルフ場のコースの芝を刈ったり、コースに水撒きをして、芝を枯らさないようにしたり、落ち葉の時期になったら、落ち葉でゴルフボールが見えなくなるので、落ち葉の除去をしたりと、そんな仕事をしていました。冬期は深夜2時くらいに出勤して、朝まで荷物の仕分けをする仕事をしていました。12月は御歳暮の時期でもあるので、荷物がいつも以上に多く、近くに有名なスキー場もあるので、道内外から送られてくる、山のようなスキーやスノーボードなどの仕分けにも追われていました。ゴルフ場も荷物の仕分けも決してつまらなかつた訳でもなく、そこまで大変、という訳でもなかつたので、辞めるつもりは一切なく、この仕事がずっと続くものだと思っていました。

そんな状況が一変したのが、当時付き合っていた今の奥さんと結婚の話を進めていくうちに、今のこの仕事のままでは生活していけない事に気づいてしまいました。夏も冬も季節職員という形だったので、定職というものではなく、給料も安いし、福利厚生というものも無きに等しいと、とても家族を持つには厳しい状態でした。結婚して生活していくためには、まず『正社員』にならないといけないと思い、ハローワークに仕事を探しに行ったりしているうちに、友人から今の職場の求人が出ている事を聞き、面接していただいたのち、今の病院に就職することが出来た。というものが大まかな経緯です。私の『介護の仕事』を選んだきっかけの一つ目の『生活の為』です。

その当時は、『介護の仕事』に就職はしましたが、『介護の仕事』について深く考えていませんでした。『介護の仕事』は仕事のひとつとしか考えてなく、それはリハビリテーションの助手をしている時も、その考えは何一つ変わりませんでした。

そんなある日の事、いつもの様にリハビリの助手の仕事をしていると、その当時の病院の事務長に一方的に話をされました。

「お前は全く向上心がないのか？40歳にも50歳にもなっても、ずっとリハビリの助手のままでもいいのか？このまま年を重ねていって、リハ助手という下つ端として働いていて、奥さんや自分の子供に恥ずかしくはないのか？そもそもお前自身悔しくないのか」とはつきり言われてしまいました。確かにそれは正論で、というか正論過ぎて、その時事務長に対して言い返すことも出来ず、ただただ悔しいし憎らしい気持ちしか生ませませんでした。ただ笑って「そうですねえ」というのが精一杯でした。言われる前から、少しずつ思っではいたので、いざ言われてしまうと、言われた事が悔しくて悔しくて、今の職場を辞めてしまおう、とも考えてしまいました。しかし、それでは今までとやっている事は一緒で、何も変わらないと思い、今出来ることを一つずつやっていこう、と心に決めました。リハビリの助手を辞める事にし、病棟の介護員としてまた一から働く決意をしました。これが私の2番目と3番目の『介護の仕事』を選んだきっかけの『自分を変える』『事務長を見返す』事です。

リハビリの助手から、私は病棟の介護員になりました。この時、私はひとつ心に決めていたことがあります。それは『絶対ケアマネジャーの資格を取る』という事です。ただただ介護員として働いては、『事務長を見返す』事など到底出来る訳もなく、やるからにはとことん上を目指してみよう、と思ったからです。そのためには、まず介護福祉士の資格を得てから、ケアマネジャーの試験を受けるのが、一番の近道だと知りました。介護福祉士の資格を取らないで、ケアマネジャーの試験を受けることも出来ましたが、何年間か待たされてしまうのが、自分の中ではとても耐える事が出来なかつたので、【介護福祉士の資格を得て、ケアマネジャーの試験を受ける】ということを決めました。ただ単純に早く受験できる、と最初は思っていました。私は『介護の仕事』というものに対して、今まで真剣に向き合つたことがなかつたので、介護福祉士の勉強と普段介護員として行つてゐる業務を通じて、『介護の仕事』とは何か？というものを少しでも知ることができ、私の中で、とても貴重な経験となりました。

そのおかげで、介護福祉士の試験も一発で合格することが出来、その後のケアマネジャーの試験も、一発で合格することが出来ました。この本を読んでいる方達の中には、「介護福祉士もケアマネジャーも一発合格できるなんて、相当勉強したんでしょ？」と思う人もいます。実際、そういう風に言われたこともありましたが、しかし、実際は全然そんな事ありませんでした。子供の保育所の行事がある度に積極的に参加していたし、プライベートの余暇活動も、いっぱい行っていましたので、「大変努力いたしました」なんて言

っちゃったら、他の受験生の方々に大変失礼になってしまうので、口が裂けても「がんばった」なんて言えません。受験勉強よりも、勉強以外の活動のほうに、自分の時間をいっぱいかけていたと、今そう思います。

私の『仕事』に対する考えとしては、『仕事』も大事だとは思いますが、やはりプライベートの時間、家族や両親や友人、S I Kの仲間と過ごす時間の方が私の中では何十倍も大切な時間です。

S I Kと言うのは、保育所の修了を祝う会の時に結成された、修了児の親の集まりで、わが子が保育所を修了して、小学校に入学してからも、皆で集まってお酒を飲んだり、蘭越町の行事（ミニバレー大会や軽トラ綱引き等々）に参加したりと、様々な活動をしている会です。名前の由来は、S（修了を）I（祝う）K（会）から始まり、今はたしかS（修了しても）I（会いたい）K（会）だったかな？に形を変えて継続しています。S I Kの皆さま、名前の由来間違っていたらごめんなさい！！

そんな感じなので、私の頭の中では、仕事に対するウエイトは、そこまで大きなものはありません。仕事なんて、「勤まればなんでもいいや」と思っていたくらいなので、別に『介護の仕事』に深いこだわりがあったわけでもないのです。

ではなぜ、こんな『きつい・汚い・危険・給料が安い』な3Kだが4Kだかわからない仕事でもある、『介護の仕事』を続けているのか？とふと考えた時に、私の今まで生きてきた中で、ひとつ思い当たる記憶があったのを思い出しました。

それは、私が中学生の時の事でした。当時私は、クロスカントリースキー（クロカン）少年団に入っていました。決して上手ではなく、大会に出ても、下から数えた方が早いくらい、遅い選手でした。でも、何故か辞めることなくクロカンは続けていました。

そんなある日の事、いつも通りにクロカンの練習に行くと、当時の指導者の方から、今度チセヌプリスキー場で、身体障害者のスキーの大会があつて、私たちに障害者のクロスカントリーの競技のお手伝いをお願いできないか？と言うものでした。特に断る理由もなかったので、私と一緒にクロカンをやっていた友人達も、身体障害者のクロカン大会の手伝いをする事になりました。

当時の私は、身体障害者と聞いて、得体の知れないものに触れるみたいで、怖いとか不安とか、マイナスイメージしか持っていませんでした。

大会当日になり、大会の運営委員の方より、私たちがお手伝い（本当は介助というべきかもしれないが、当時の私は介助という言葉を知らなかったの）をする選手を紹介されました。その選手の方は、目が全く見えない全盲の方で、言葉でコミュニケーションを取りながら、選手をゴールへ導いて上げてください、との事でした。

「おはようございます。今日はよろしくお願ひします。」とその選手の方より挨拶がありました。競技開始まで、その選手の方とコミュニケーションを取る時間がありました。その選手の方の名前は忘れてしまいましたが、競技中の作戦会議や、それ以外の自分たちの

生い立ちなど、さまざまな話をして過ごしました。話をしている時は、障害者という事も忘れ、普通に話をしていた事を思い出しました。

障害者の方と今まで接する経験がなかったもので、最初は得体の知れないものに触れるみたいで、怖いというイメージしかありませんでしたが、その選手の方と話をしていくうち、次第にそのイメージもプラスのイメージに変わっていききました。

クロカンの競技会が始まりました。私は、パートナーの選手の方に「右曲がってください」とか「そこはまっすぐ進んでください」とかいろいろな指示を送りました。選手の方は私の指示がないと、どこを走ればいいか分からず、万が一、私が間違った指示を送ってしまうと、その選手の方もその通りに行動してしまいます。その為か私は、間違った指示は出来ないし、間違えることが出来ないというプレッシャーもあつてか、競技中はずっと緊張していました。

競技は500メートルくらいのコースを一周するというもので、大会運営委員の方から「指示を間違えなければ大丈夫だから」と言われていました。最初から中盤にかけては順調に進み、このまま行けば1着になれるのでは？と思っていました。しかし、最終コーナーで、私が上手く指示を出せなかったせいで、コースから出てしまい、大回りになってしまいました。私が上手く指示を出せていたら、そのままゴールして、1着になれたかもしれなかったのですが、結局、その選手の方は順位を二つ落として3着になってしまいました。私はその事を悔やんで、「すいませんでした」と選手の方に謝りました。その選手の方

は「いいよ」と笑顔で言ってくれたのが、今でも印象に残ります。しかし私は、ちゃんとあの時に指示を出せていたら・・・というのが心に残り、不完全燃焼なまま大会は終了してしまいました。

大会が終わってしばらくしてから、その選手の方より私宛にお手紙が届きました。

「大会ではとてもお世話になりました。洋平さんと楽しい時間が過ごせて、とてもいい思い出が出来ました。ありがとうございました。」というものでした。その手紙には「悔しかった」とは一言も書いてなく、「楽しかった」と書かれていましたそれに、目が見えないのに、一生懸命に字を書いてくれたことがとても嬉しく思いました。あの時は、選手の方に、順位発表の時に「僕がちゃんと指示を出せていたら、一番になれました」と正直に言いました。なので、私の頭の中では、その選手の方は「相当悔しがっていて、私の事を恨んでいる。私以外の人が手伝っていれば、1着でゴールできたのに」と勝手に考えていました。その手紙を読んで、私は何か不思議な気持ちになりました。

あれ以来、その選手の方とは連絡は取れていません。今思えば、あの経験があったからこそ、『介護の仕事』と言う、人の支えになるという、他の人が嫌がるような仕事も続いているのかな、とも思います。これが、きっかけの四つ目の『人を支えるという思い』のかな、と思います。

今まで4つ、『介護の仕事』をするきっかけを書きましたが、結局のところ、私が『介護の仕事』をするきっかけとはなんだったのだろうか？

一つ目は『生活の為』？

二つ目は『自分を変える』ため？

三つ目は『事務長を見返す』ため？

四つ目は『人を支えるという思い』があったから？

生活の為と言っても、他にももつと給料の良い仕事は山ほどあるし、仕事が変われば、自分だって嫌でも変わらないといけない。私にご指導？下さった事務長だって、今は病院を退職され、どこで何をしているかもわからない。しかし、4つ目の人を支えるという思いがあったからこそ、というか、この一つ一つのきっかけや思いを通じて、その全てが私の中の『介護の仕事』をするきっかけとなり、『介護の仕事』が続いているきっかけなのだと思います。

ケアマネジャーの実務研修で、他の事業所の方とお話する機会がありました。いろいろ話を聞いていると、皆さんが前職は何だった？という話になりました。

元々牧場で働いていたが、グループホームの開設に参加し、今はそのグループホームの施設長をやっている方。旦那さんと離婚し、小さい子供を抱え、路頭に迷っている時に、両親の勧めで訪問介護の事業所を立ち上げ、今はその事業所の所長をしている方。普通に会社員をしていたが、老人介護に魅力を感じて、会社を退職して通所リハビリで働きながら、ケアマネジャーの勉強をしていた方。皆さん様々な思いや経験をしながら『介護の仕

事』をしているんだなあ、と痛感いたしました。そういう方々の姿を見て、私も頑張らないといけないな、と改めて思いました。

『介護』の『介』とは、媒介の介で、誰かにとつての『杖』になればいい、ということだが、ただ、『杖』になればいいというわけじゃなく、『考える杖』にならないといけない、と何かの本で読んだのを思い出しました。誰かを気に掛ける、という気持ちから自分には何が出来るのだろうかと考え、人が迷った時に、杖の倒れた方向に進むという占いもあるように、杖で支えられる人々の、進むべき方向を示してあげる、という使命も追っています。私はそんな『介護の仕事』に携わる者として、これからもいろいろな人たちに感謝しつつ、『介護の仕事』を勉強し続けて、身体（特に腰）が続く限りは、この『介護の仕事』を続けて行けたらいいな、と思う今日この頃です。

私が『介護の仕事』を選んだきっかけ

2014年3月1日 発行

著者 佐々木 洋平

発行者 佐々木 洋平

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Youhei Sasaki 2014